



日本記者クラブ

著者と語る
『評伝 石牟礼道子ー渚に立つひとー』

米本浩二
毎日新聞西部本社学芸グループ記者

2018年3月26日

水俣病を知らしめた『苦海浄土』を著し、今年2月に死去した作家、詩人の石牟礼道子さん。毎日新聞西部本社記者の米本浩二さんは、石牟礼さんについて初となる本格的な評伝を書き上げた。

神格化された存在としてまつり上げられがちな石牟礼さんだが、実際に長期間ともに時間を過ごし、言葉を交わした著者は、石牟礼さんの生の姿を描く。そのリアリティは圧倒的で、長年の石牟礼読者にさえ新たな像を提示するだろう。

米本さんは訥々としたしゃべりで、石牟礼さんとこの本を語った。「近代と前近代、自然と非自然、生と死…石牟礼さんは、常にそういうはざまである『渚』に立っていた」

司会：小川記代子 日本記者クラブ企画委員（産経新聞東京本社編集局副編集長）

[YouTube 日本記者クラブチャンネル動画](#)

©公益社団法人 日本記者クラブ

司会＝小川記代子 日本記者クラブ企画委員
(産経新聞) 皆様、こんにちは。きょうは著者と語るとしまして、こちらの本『評伝 石牟礼道子―渾に立つひと―』を書かれ、先ごろ、読売文学賞の評論・伝記賞を受賞なさいました、毎日新聞記者の米本浩二さんにおいでいただきました。

私は日本記者クラブの企画委員の小川と申します。よろしく願いいたします。

もうお読みになられている方も多いと思うんですけども、『苦界浄土』で知られる石牟礼さんの初の本格評伝を、現役記者でいらっしゃる米本さんが書かれたわけです。

私も読ませていただきまして、本当に石牟礼さんという大巨人ですよ。どこからさわっていいのかわからないぐらいな巨人の世界に独特なアプローチで迫って、そしてまた、記者であるからなのか、少し俯瞰した部分もある。おそらく石牟礼さんの作品を読んだことのない人もいらっしゃると思うんです。ちょっと大き過ぎて、もう触れられないというか、恐れ多いというか、だけど、これを読むと、読んでみたいと必ず思われる。読んでみたいと思わせる労作になっています。

先ほどから申しあげているように、米本さんは毎日新聞の著名な学芸記者でいらっしゃる。だから、新聞記者をしながら、ずっとコツコツとプライベートな時間を全部これに費やして仕上げました。もう3年ぐらい取材したんですね。2014年からですから、3年間、みっちり通われて取材なさった作品です。その辺のご苦労のほども語っていただけたと思います。きょうはじっくりとお話を伺いたいと思いますので、どうぞ、お願いいたします。

いつも台所に怖そうなおじさんが…

米本浩二・毎日新聞西部本社学芸グループ記者 お忙しいところ、きょうはありがとうございます。

「神様・石牟礼道子」ではなくて、「人間・石牟礼道子」を書こうというのが、そもそもの動機であります。もっとさかのぼって言うと、

石牟礼さんのところに行ったら、必ず怖そうなおじさんが台所にいて、台所で何かつくっているんですよ。私は10年、15年ぐらい前から石牟礼さんのところに行くんですけど——それと、さっき著名と言われたけれども、全く著名ではなく、こっぴど記者でございます。それで、とにかく石牟礼さんのところには非常に行きやすいんです。アポも要らんし、ただ行けば、「あらっ」という感じ。だから、何かめげたときは、昔から行っていたんです、学芸部に行く前から。

司会 行く前からですか。

米本 ええ。行っていたら、行ってどうなるわけでも何でもないんですけども——こうやって(記者席ではなく司会者に体を向けて)、ときどき話をしているんですか。

司会 (笑)。

米本 とにかく行くようにしていたら、まず一軒家、石牟礼さんは真宗寺(熊本市東区)というお寺の下、そこに大分長くいらしたんですけども、その次に湖東(同じく東区)の一軒家、そこが私が最初お会いしたところで、最初に行ったときも、怖そうなおじさんが何かつくっていらした。

後から、なるほど、あれが渡辺京二さんか。たまにつくっているんだったらわかるんですけども、つまり、30年ぐらい、いつも——しかも、昼の2時、3時には渡辺さんがいて、夜10時、11時までいるんですよ。

熊本の人は、そういうふうには石牟礼さんのところに渡辺さんがいらっしゃるのを不思議に思わないんですね。でも、多分、不思議に思うはずなんですよ。天下の奇観ですよ。歴史家の渡辺さんが石牟礼さんのところで白菜か何かを切っているわけ。あんた、もっとほかにすることあるでしょう。何で、1日の一番いい時間を石牟礼さんのために費やしているのだろうな、という疑問がありました。

最初は、さっき小川さんがおっしゃったように、石牟礼さんにしても、例えば渡辺さんにしても、書くとしても、世界が広過ぎるんですね。著作も膨大にあるし、とても太刀打ちできんな

と思っていたんですよ。でも、私ももう 40～50 年生きていて、一つ経験則があって——つまり、こうやって小川さんに向かってしゃべるとしゃべりやすい。

司会 こんなに大勢いらっしゃるのに(笑)。

米本 経験則があって、何かとにかくつないでいこう、続けていったら何かなるというのはありました。40、50 になってきたからね。

僕は家内が八代——熊本と八代の地理関係は皆さんわかりますか。要するに、家内を里帰りか何かで連れていくときは、途中、私だけ、石牟礼さんのところに寄るとか、逆も、私だけ寄るとか、とにかく行く時間をふやして。

最初は渡辺さんの献立——正岡子規に『仰臥漫録』という圧倒的な迫力の本があります。要するに、ずらっと献立があって、それだけで何というか、ものすごい深いものを書いているわけでしょう。世界観であり、世相であり。だから、私も渡辺さんがつくるものを通して、石牟礼さんと渡辺さんの関係が書けるのではないかなと思ったんです。それで、徐々に準備はしていたんです。

「神様」の肉声を

この本では、2014 年春スタートということになっているけれども、もうちょっと前から何か書きたいなと思っていて。ところが、正攻法で書くためには、やっぱり渡辺さん、石牟礼さんに書きますという理解が必要ですね。ずうっと話を聞いておいて、いきなり書くのはフェアではないので、書くということは伝えないといけないから、2013 年に渡辺さんに会いに行ったら、石牟礼さんのことを書きたいんですけどもと言ったら、渡辺さんも、実は、書く人を探していたんですよ。

渡辺京二というのは歴史家でしょう。だから、文字として残ってないと消えてしまうというのがわかっていた。渡辺さんも、別に自分の献立を書き残してもらいたいわけでも何でもないんだけど、ただ、道子さんというのは、いまで言ったら、天然。要するに、変な話、おもしろい話が山のようにあるんです。そういう

のは、ごく普通の東京あたりで本で読んでいて論じるのでは、もうすくい切れないうんですよ。それこそ、「神様・石牟礼道子」になってしまうだけ。渡辺京二という人は、そういう間抜けな話をもっと書いてほしかった。

ただ、さっき言ったように、熊本では石牟礼・渡辺の関係の中に立ち入ることは、やっぱり一種のタブーなんですよ。多分、熊本の戦後最大のタブーなんです(笑)。でも、私は、運がいいことに福岡にいたんです。だから、何かあるときは、パッと福岡に行ってしまういいんです、「すみません」とか言って。

で、渡辺さんに書きますと言ったら、渡辺さんとしても、「よっしゃ、じゃあ、道子さんにも俺が言っておくから、通いなさい」みたいなね。

私が書くとしたら、やっぱり道子さんの肉声しかないでしょう。ほかの石牟礼論というのは、もう山のようにあるわけですから、いまさら僕が入っていく余地はないんですよ。ないけれども、肉声をとって、それを自分なりの解釈で組み立てられたら、何か形になるかなと思ったんです。

道子さんは、まだそのころは元気だったから、行けば行ったで、皇后様の話とか、自分の「怨」という黒い旗の話とか、とにかく聞けば答える人。何か隠すということはないわけ。何でもしゃべるし、何というか、オープンなんです。

司会 よくみせようとかもない？

米本 全くない。もうしゃべってしまう。

だから、この本でも気をつけないといけないことは、プライバシーのこと。評伝というのは本当に微妙でしょう。どこまで書けばいいのかというのは、常に……。これだけでもほんとにね。

司会 逆に、書き手のほうがそこを気にしていたんですね。

米本 そうです。どこまで書くか。

ただ、向こうは、石牟礼道子にしても、渡辺京二にしても、書く人なわけで、その辺の機微は多分 2 人はよくわかっていた。だから、いざ

任せるとなったら、時々みせて2人の反応を聞いたんですけども、2人がちょっとでも「これは……」と言ったら、もうやめてしまうつもりだったんですけども、4年、5年になるんですけども、そういうことは全くなく。

司会 一回も、「これは……」というのはなかったんですか。

米本 なかった。一回だけ渡辺さんが「道子さんは、こんな肥後の山奥のばあさんみたいな言葉遣いはしない」と言ったんですけども、テープにはちゃんとあるんですよ。ただ、渡辺さんがそうおっしゃるんだったら、わかりましたと。で、ちょっと都会的にしたりね。そういうのはありました。

でも、さすがに2人、私の持論というか、30年ぐらい記者をさせてもらっていて、チンピラほど文句言うんです。偉い人ほど何も言わない。今回もそれに甘えたかもしれないけれども、とにかく道子さんのところへ通って、聞くとなったら時系列で聞いていかないといけない。

ただ問題は、Aという話を振ったら、それについて答えが返ってくるような人ではないわけですね。Aという言葉振ったら、大体一巡するのに、その日のうちに終わったらいいほうで、次の日、1週間後。

でも、すごいのは、必ず着地するんですよ。別に彼女が律儀だとかいい人だとかいうのではなくて、多分、頭にインプットされたものは最後まで完結しないと、彼女自身おもしろくない。

だから、そういう流れを、絶対に途中で口を入れたりしたらだめなの。彼女のしゃべるまま、とにかく何か聞くというのをやめて、道子さんと一緒に時を過ごすみたいな、何とか聞くと思わないのがコツだと思います、道子さんに関しては。

司会 それは最初から変えてこなかったんですか。

米本 最初から。最初から何となくそう思ったけれども、何回かやってみて、ああ、やっぱり何か聞くというのはだめで、とにかく一緒にいて、3時間か4時間いたら、ある程度核心を

つく言葉が出てくるんです。で、時々本とかをチラッとみせながら、石牟礼さんの無意識に働きかけるようにして。

とにかく石牟礼さんとしては、Aについて語るには、Bのことをまず言わなければいけないし、これについて語るにはCを言わなければいけないし、柳の木を書くのだったら、柳の木のことをそのまま書けばいいのに、そうしなくて、柳の木にまつわる思い出とかに行ってしまうんですよ。だから、それを遮ってはいけないので、というような感じです。

どこかに孤独の膜

それで、一番の道子さんの人となりですね。多分、彼女は生まれてから心から楽しいと思ったことは一回もない人だなと思いました。みんなと一緒にワイワイ楽しくしていても、石牟礼さん自身、明るい笑い声を立てていらっしゃっても、心の底では楽しんでいない。どこか孤独の膜みたいなものがあって、楽しめない人。

一方では、多分、それが書く原動力になっていて、埋めがたい、人とわかり合えないような違和感というか、悲しみというか、苦しみというか——を書くことによって、前に進んでいる人。

本に書かせてもらったんですけども、大体結婚したその年に、いきなり自殺未遂とかをしていて、それが3回目なわけですよ。私には想像もできないんですけども、生きるよりか死んだほうがいいということなんですよ。

それはいまに始まったことではなくて、小さいころから、そもそも赤ちゃんのころから、「いや、この子は何という子やろ。こんなにのけぞって、引きつけを起こすまで」という、お母さんのハルノさんのテープがいま残っていますが、とにかく世の中と反りが合わん。

親はものすごくいい人なんですよ。ハルノさん、あと、お父さんの亀太郎さん、本当にいい人で、こんないいご両親がおって、何で寂しいのかなと思うんですけども、一つは時代もありますね。

ハルノも亀太郎もざっくり言うとお前近代と

というか、例えば道子さんは小学校に入るのが1年おくられているんですよ。なぜおくれたかという、単なる役所の通知ミスね。で、道子さんが学校に行ったら、1つ下の一さんという弟が何と教室におるわけです。一緒になってしまった。学校の先生は双子だと思っているんですよ。道子さんだけは釈然としないんです。何で弟がおるんだと思うけれども、それは大人の事情で、それで、お父さんたちも一応学校には抗議したでしょうけれども、基本的には平気なんですよ。

要するに、学校なんて、近代の制度というか、仕組みであって、別にどうでもよからうというのが本音であつたに違いないです。実際、お母さんのハルノさんにしても、自分の生年月日すら知らないんですよ。テープで、お年はお幾つですかと聞かれたハルノさんが、へへへっと笑ってごまかしているのがあるんですけれども、要するに、数字とか、学校とか、役場とか、そういうのはどうでもいい両親のもとに生まれて、多分、道子さんも基本的にはどうでもいいんだけれども、そこにやっぱりチッソに代表される近代社会が来て、道子さんなんかはチッソの社歌を歌いながら学校に行ったりしていた。

要するに、近代が浸食してきているわけ。浸食といっても、それで町は成り立っているわけだから、一方で、悪いわけでも何でもないんですね。そういう、前近代のためでもないし、近代のためにもなり切れないというのが、まず道子さんですよ。

だから、苦しかったと思う。10代、20代の道子さんのノートを見ると、世の中への呪詛に満ちているんですよ、みんな、死んじまえとか。『苦海浄土』のあの崇高な道子さんはどこへ行ったのかみたいな。でも、太宰治のほんとのノートみたい。人への攻撃というか、呪詛というか、書くけれども、それで苦しみは解消できないんですね。

だから、遺書みたいなものも随分書いているんですよ。昔から、石牟礼道子の遺書というのはものすごく多いです。何通もある。「遺書」と書きながら、「遺書」という1行だけで終わっていたり。とにかく、何かそういうことを書

きたかったんでしょうね。

旦那さんへの遺書もあるし、父母への遺書もあるけれども、とにかくそうこうしているうちに息子が生まれたわけですよ、道生さん。息子が生まれたら、また状況が変わってくるんですよ、かわいくなってしまって。この息子を育てないかんというので。だから、息子ができてからは、もう死ぬのはやめてしまったんですね。

司会 もう遺書は書いてないんですね。

米本 たまに書くけれども、死に行くまでには至らない。

「サークル村」で目からうろこ

ただ、30歳ぐらいのときにボーヴォワールの『第二の性』というのがあるでしょう、あれを図書館で借りて読んだりとか、本は読んでいた。基本的に読まない人ですけど、やはり書くことでしか自分は生きられないという思いが20代後半になって募ってきたらしく——水俣の、私が調査したんです。調査というか、それを調べた人がいて、道子さんがボーヴォワールの『第二の性』を借りているよと教えてくれた人がいた。あ、そう、確かにこれは道子さんの字だと思った。夏に1週間借りている。でも、それを読んだかどうか分からないですよ。多分、読んではいないと思う。最初のほうを読んだりとか、ある程度読みはしたろうけれども、道子さんが最初から最後まで読み通すことはあまりないわけですね。

司会 ないんですか。

米本 ない、ない、昔から。いまもそう。いまも随分な本が道子さんのもとには謹呈されてくるけれども——あまり言ってはまずいですね（笑）。でも、多分、道子さんは部分をみて本質を会得するタイプの読書家なんです。それで間違いない、いままで。

だから、生まれて初めて読んだ本が『大菩薩峠』で、これは、家が石工さんで、若者がいっぱいおったから、そういう本がいっぱいあったわけですよ。

それで、31ぐらいのときに、「サークル村」というところに行っている。「サークル村」と

というのは、上野英信とか、森崎和江とか、谷川雁とかがいたところで、道子さんとしては、これは初めて対等に語り合えるような人々なわけですよ。谷川とか森崎という人は、初めて語るに足る相手なわけ。

彼たちの作品をみたら、やっぱり目からうろこだと思ったに違いない。要するに、森崎さんにしても、人の話を聞くでしょう。炭坑の、地下に潜っている夫婦の話とかを書いているわけでしょう。あと、上野英信さんにしても、炭鉱労働者の話を絵話というか、そういうふうな民話調にして書いているわけで、これだと思ったに違いないですよ。

要するに、自分が自分がと言っていたのでは突破はできないんだ。他人を書くことで、逆に自分の奥深いことを表現できるのだと、道子さんは「サークル村」で思ったに違いないです。

それで、自分もそうやって書いたのが『奇病』で、それを「サークル村」に出していますけれども、それが天草から来たゆきという女性患者の語りですよ。『苦海浄土』に出てくる、10年ぐらい前なので、ごつごつしているけれども、原型というか、つかんだぞみたいなの……。

『奇病』というのは、50前ぐらいに「サークル村」に載った。確かに患者さんの話を書いているんだけど、多分、『奇病』を書きながら道子さんは自分のことを書いていると思ったんでしょうね。えらい筆が進む、進む。あ、これは自分のことではないかなとか、でも、これはゆきさんのことだよなとか思いながら、多分、本人も半信半疑で書いたのが『奇病』です。あ、これだと思ったでしょう。

『苦海浄土』を書くための孤独だったのかな

だから、それ以後も、破壊的なノートなんかはちょっと控えるようになりましたもんね。それ以後、患者さんのところに行って、患者さんの聲咳に接するようになったから、水俣病患者を書くことで、要するに、患者さんを救済する前に自分を救済せんといかんわけだから、死にたがる自分を何とかせんといかんから、でも、石牟礼道子さんは、多分、水俣病患者を書けば

自分が生きていけると思ったんでしょう。患者さんを書くことが自分の孤独、患者さんというのはものすごく深い絶対的な孤独ですけども、それに匹敵する孤独を30代、40代直前までずっと養ってきたんですよ。

逆に言うと、『苦海浄土』を書くために孤独だったのかもしれないね。患者の孤独がわかるためには、自分がそのぐらい孤独を抱えてないといけないわけでしょう。だから、別の言い方をするならば、40代までの孤独は、『苦海浄土』を書くための孤独だったのかな、といまになって思います。

もう一つは、同時に、運動というようなものが始まるわけです。患者さん救済運動ですね。道子さん書きながら、書くだけはいかんかと。目の前で苦しんでいる人たちを何とか手伝わなければいかん。ひとりでは無理だろう。チラッと横を向いたら、渡辺さんがいた。

「熊本風土記」という渡辺さんがつくっていた薄っぺらい雑誌、渡辺さんのお姉さんが弟のためにお金を出してつくった雑誌、これに石牟礼道子の『苦海浄土』の前身となる「海と空のあいだに」の連載が始まります。連載が始まったから急遽書いたのではなくて、おそらく連載スタート時には、もうノートの形ですすでにほぼ完成していたんです。ただ、一応印刷所に送らないかんけん、毎回、石牟礼さんが原稿用紙に清書したでしょうね。

ただ、渡辺さんもよく書いているように、有名な、原稿用紙の使い方が全く……。最初の段落を下げるというのもしてないし。ただ、そういう体裁さえ整えれば、すぐ使える原稿だったわけですよ。

それで、とにかく『苦海浄土』が本になり、本になるというか、それを、上野英信さんが「熊本風土記」を何冊か東京に持ってきて、何社か、岩波書店とかでは断られて、結局、講談社で出してもらったんだけど、渡辺さんとのそういう同志的、編集者的な交流はそこで終わらなかったですね。

69年1月に『苦海浄土』が出て、その初夏ぐらいに水俣病を告発する会みたいなのが

できていて、その年に渡辺京二さんがチッソの正門前に4~5人で座り込んだ。それが水俣病闘争開始ののろしなんですけれども、その前の年から、石牟礼さんとしては渡辺さんに何とか力になってくださいと言っていた。

渡辺さんの御飯づくりは闘争

なぜ渡辺さんかという、渡辺さんも心に亀裂を抱えた人だったからにほかならない。要するに、渡辺さんも孤独を抱えた人だったというのを、石牟礼道子は会ったらすぐにわかったに違いないです、感じとしてね。「あ、これは自分と同類だ」と思ったに違いない。京二さんのほうも、まるっきり自分とは違うタイプだけれども、何か離れがたいものを感じたに違いない。

そこで、そもそもの発端として、2人の恋愛感情にも似た最初の結びつきが68年秋から69年春にかけてあって、ただ、お互い、家庭もあるので、闘争は闘争。とにかく約束したのは、2人だけのことにしておいて、わからないようにしておこう、というふうなやりとりがあったんですね。

その後、闘争のバリケードの上で一緒に死ぬねというふうな約束を、言葉だけではなくて、言葉というか、ちゃんとお手紙みたいな、そういう約束、かたい契りというか、われわれの好きとか嫌いとかを超えた関係、要するに、近代主義に対抗するための同志ですよ。

ただ、お互い、男と女だったから、そして、お互い魅力的なわけですよ。女からみたら、渡辺さんというのは超二枚目で、頭がいいし、すごく魅力的。道子さんも、40になっているけれども、天真爛漫な方で、美人だしね。だから、お互い引かれるものがあるのは当然で、ただ、そっちのほうには行かずに、踏みとどまって現在に至っているところがすごいんです。

司会 そのまま現在に至っているんですね。

米本 現在に至っている。

だから、渡辺さんの御飯づくりというのは、闘争なわけですよ。台所で気のいいおやじが料理の腕を奮っている、確かにそうだけれども。でも、闘争とは言いませんよ。絶対本人たちも

言わないし、周りも言わないけれども、一応これは闘いなわけですね。2人は、1969年寒いころ交わした約束は、いままで胸の奥に秘めて闘ってきているわけです。ただ、誰もそれを言うわけでもないし。

だから、編集者としての渡辺、水俣病闘争が2~3年で、要するに、裁判闘争だけでは、あなたの症状に応じて、こういう法律に照らして、これこれ幾らお払いしましょうみたいな、商取引みたいなことに、近代の組織の中ではどうしてもなってしまうわけですね。道子さんの中では、そういうのはもう限界だと。だから、黒い「怨」という旗をいつの間にか狭いと思うようになった。

道子さんが逆にどう闘っていたかという、**「許す」**という言葉、杉本栄子さんとか、あるいは緒方正人さんの**「チッソは自分であった」**みたいな。確かに加害者を糾弾するのも重要だし、やったことは反省してもらって、今後、未来永劫に生かしてもらわなければいけないというのもそうだけれども、むしろ**「許す」**と言ったほうが加害者のほうは困るんですよ。許されてしまったけれども、では、お金を払わなくて、どうしたらいいの、みたいな。

逆に、**「許す」**ということは、未来永劫、一緒に考えようということなんですよ。要するに、便利さを追求して、快適な空間にいて、貧しい人たちにそういうマイナス面を押しつけるような近代の構造を一緒に考えよう。チッソが悪い。確かにそうだけれども、でも、ナイロンとか、チッソの製品は、われわれも享受しているわけですよ。だから、誰が悪いというよりも、みんなで状況を考えようという、そういうシンボルが**「許す」**という言葉ですね。

ただ、道子さんとしても、自分は患者当事者ではない。道子さんは、終始、**「加勢」**という言葉が好きでした。お手伝い。お手伝いとは言わずに、加勢。要するに、患者さんのところに行って、自分はお手伝いだ、加勢だ。だから、渡辺さんのつくった石牟礼道子年表をみると、チッソ本社で患者さんに付き添いとか、何とかに付き添いとかね。それは、渡辺さんも石牟礼さんの意志をくんで、付き添いというふうにし

ゃんと書いている。それは、自分は患者さんとは違って、主体的にはかかわれない、あくまでも加勢である、という石牟礼さんの強い意志なんですよ。

でも、結果的には、チツソからみたら、例えばチツソの社員は、座り込んでいる中に石牟礼さんとかがいたら、「おまえがこの騒動の張本人なんだ」とよく言ったらしい。で、隣にいた渡辺さんは、確かにそうだと思っていた。

だから、お互い、石牟礼さんが主導となってやっていることというのはわかっているけれども、基本的には、石牟礼さんとしてはお手伝い、加勢であるという立場は崩しませんでした。

最期まで「悶え神」

「許す」という言葉もそうで、石牟礼さん自身がチツソを許すことはないわけですね。ただ、杉本さんたちの「許す」という言葉を引用して、共感を込めて書くことはできる。逆に、そうすることで、いまの患者さんの置かれた位相というか、立場を浮き彫りにすることもできるわけですね。そういうことでした。

それと、さっきの孤独と裏腹で、やっぱり石牟礼さんは終始人を思いやる人だった。小さいころからそうで、10代のころ、戦災孤児を汽車の中で拾ってきて、家に連れて帰る。ただ、石牟礼さんが世話するわけではなくて、お母さんがするわけです。そういうこともあった。

あとは、水俣病患者さんへの献身といい、この4~5年は自分をご病気になって結構入院を繰り返された。でも、ベッドの中でも「悶え神」。人を思いやって常にもだえている。例えば私なんかが行ったら、私に限らず、お見舞い客が来たら、この人に何食わそうかといつも思うわけ。病室で、火の気はないんですよ。でも、石牟礼さんの頭の中には献立が浮かんでくるんです。煮しめとかね。

だから、お客さんが来ると、例えば私とかがたまたま行ったりすると、「あのう、ニンジンば買ってくださいますか」とか言うんですよ。「ここでニンジン買ってきてどうするんですか。夜も遅いから、石牟礼さん、じゃあ、今度

来るとき、買ってきますから」。「よかです。じゃあ、私が買ってきます」。買えるわけじゃないですよ。車椅子で、しかも、どの店に行くんだ。

だから、そういうときは買ってきて、火の気も何もないので、ただ、石牟礼さんも気が済まないから、ちょっとニンジンをお切りになったりするときがあるんですね。お切りになったら、調理場が施設の中にはあるので、ちょっと煮てくれませんかみたいなことは言って、それを食べさせたりしたことはあります。

何かお土産を持たせようとするのは、別に石牟礼さんに限らず、年配の方はよくあるけれども、石牟礼さんの場合は特にそういうことが顕著で、病気になっても「悶え神」さんだったんですよ。

石牟礼さんのご主人の弘さんが2~3年前に亡くなって、夏に亡くなったんですけども、そのときに、息子さんの道生さんとかも名古屋から来て、年金の引き継ぎとかを道子さんと一緒にやっていた。そこにやっぱり渡辺さんも来て、渡辺さんは毎日来るわけだから、当然、顔を合わせるわけで、息子さんとしてはお母さんを渡辺さんに年中みてもらっているわけですよ。当然、「すみません。渡辺さん、いつもすみません」、とにかくお礼を言うわけです。

でも、渡辺さんは「僕に『すみません』なんて言うことはないんだよ。僕は石牟礼道子先生のおかげで自分のテーマをみつけることができたし、日々書けているのも、石牟礼さんとお話するから書けているんだ。だから、毎日来ているんだ。だから、道生君、君が僕に『済みません』なんて言うことはないんだよ」。そう言われても、息子のほうは「すみません」と言うしかないんですよ。

で、あるとき、渡辺さんがこう言ったのが印象に残っているんですけども、「道生君、あなたのお母さんは人類に貢献したんだよ」。具体的にどう貢献したのかというのは、その場の話だから、別に……。「だから、道生君、僕に『すみません』なんて言うことはまるっきりなくて、ただ、人類を救済するような人は、周りに迷惑をかけるんだよ」と言っていた(笑)。

渚に立つひと

渡辺さんがいたから道子さんも頑張って仕事ができたと、逆もそうなんです。最近の2人の著書数というのは、グーグルで調べたら、1年に1~2冊。道子さんが90だし、渡辺さんも86~87なので、この数年の出版量というのは多いでしょう。これはだてに多いわけではなくて、やっぱり2人が刺激し合っているから書いているんですよ。よく頑張っているねというのではなくて。

刺激というのとも違いますね。とにかくお互いが第一であって。だから、2人をみていると、お互いの意思というよりも、何か大なる力で2人ともそうしなければしょうがないから、一緒にいるみたいなの、ちょっと誤解されると困るけれども、そんなふうな気がしますね。それこそ、出会ってからいままです。

「渚」というのは、近代と前近代であり、道子さんが行き来した死であり生であり、あと自然と非自然であり、道子さんはそういうはざまに立つ人なんです。どっちについているわけでもなくて、常にとにかくはざまにいる人。

で、はざまに、渚にいただけではなくて、時々陸に上がって、こうやって書く、表現者なわけです。それをサポートする、現世につなぎとめておく係が渡辺さんでしょうね。放っておくと、渚に行って、どこか渚の向こうに行ってしまうでしょう。帰ってこなくなりそうだから。やっぱり誰か現世につなぎとめる人、それは渡辺さん以外になく。

それで、またよくけんかするんです。——あ、これ、オンレコですね。

司会 ええ。

米本 でも、けんかしても……。渡辺さんが怒って帰るということは日常的にあるわけです。「もう二度と来んぞ」って。それは、でも、仲がいいからそうなっているのであって、石牟礼さんもそれは百も承知で、帰ったところを見計らって石牟礼さんから電話するんですよ。そうしたら、渡辺さんも待っていて、「先ほどはすみませんでした」とまず石牟礼さんが謝る。それで、渡辺さんも気が済むから、「あ、こちら

こそ、ごめんね」というので、和解が成立。まるで名優が舞台の上で、「おっ、何とか屋」とかいう感じがどうしてもするんです。それは不謹慎で、年上の方に向かって申しわけないけれども。

あと、石牟礼さんは直し魔というか、直すことによって文章をつくっていくタイプなんです。だから、最初の第1稿はわれわれとそう変わらないわけ。第1稿はね。第2稿、第3稿、第4稿、第5稿となるにつれて、やっぱり離陸してくるといえるか、多分、本人を介して何かがおりにくるという感じなんです。こう言うと、ちょっと神がかったような言い方で恐縮なだけけれども、ただ、実感として、何か……。

僕らも、規模は小さくても、何かパッと来るときがあるではないですか。ウンウン頑張っても、いいアイデアは浮かばないけれども、ちょっと散歩に行ったら、プッと来るような。多分、書き直すことによって、道子さんもそういう自分以外の力を原稿に取り入れていって書くタイプですね。

清書するのは渡辺さんだから、大変ですよ。もう頼むけん、これでやめてくれ」というのはしょっちゅう。けんかのもとは大體それ。それでまた、道子さんが赤ペンを持つ、「頼むから、それ、やめてくれ！俺はそれが恐ろしいんだよ」という感じなんです（笑）。

司会 いま、おりにきてしまったから、しょうがないんですよ。

米本 もう書かなければしょうがない。本人も書くとなると、渡辺さんが何と言おうが書いている。

すごいのは、『石牟礼道子全集』という藤原書店から出た、箱に入った豪華な本があるんですけども、時々、道子さんがそれをみて読んでいる。読むだけでいいんだけど、右手にペンがある（笑）。「天の魚」という『苦海浄土第3部』があるんだけど、その冒頭とか、全集をみると赤が大分入っている。だから、石牟礼道子にとって高価な全集もゲラにすぎないんだな。

2人の出会いは天の配剤

司会 あれ、高いですね。(笑)。

米本 でも、それだと編集者は大変ですよ。「えっ、いつ終わるの？」という感じです。だから、渡辺さんが「ここで、手を打とう！」とおっしゃるのは無理もない。それを誰かがしないと、本当に終わらないです。

司会 それと言えるのは渡辺さんだけですか。

米本 渡辺さんですね。だから、渡辺さんがいかに重要な役割を果たしてきたか。清書するだけで大変でしょう。清書したのをまた赤で真っ赤にして、さらにそれを清書するんでしょう。さらに、それが赤で真っ赤になっていて、これは大変ですよ。

渡辺さんもそれだけではないわけでしょう。自分の仕事があるではないですか。

司会 大変高名な作家さんですからね。

米本 不思議なのは、渡辺さんがいつ仕事をしていたのか。

司会 だって、午後のいい時間は、大体いつも御飯をつくっていらっしゃるわけですよ。

米本 そうですね。1日の頭のクリアな時間は常に道子さんという、大体10時、11時に帰ってしまうわけだから、それはいまだにわからないですね。

司会 本当にこのご本のお二方の関係が、私のようなただの者からすると、いま、多分、大変控えめな言葉で言っていたかとは思いますが、不可思議というか、どう捉えていいのかわからない。でも、いまおっしゃったように、大いなる意思で結びついてしまっている2人であって、どっちがなくても、多分、どっちもなかった。

米本 そうですよ。だから、2人が出会ったということの天の配剤ね。

司会 逆に、出会わなかったら、『苦海浄土』も出てなかったかもしれない。

米本 かもしれませんね。出ていたにしても、違う形だと思います。もっと詩人みたいになっていたでしょう。いまでも詩人だけど、もっと

田舎の風変わりな詩人みたいな感じではないですか、渡辺さんがいなかったら。渡辺さんが石牟礼さんの文学的才能をカルチャーしていたんですよ。

司会 でも、そのお二方の関係の中に米本さんは入ったじゃないですか。大いなる意思に含まれてしまって、そして、何かこの本を書かされたわけですよ。

米本 でも、それはあまりにもおこがましいことで、ただ、渡辺さんと石牟礼さんの2人は、私のことは眼中になかったと思う。僕がいても、平気で徹底討論していたので、意識していたら、そんなことは言いませんよ。

けれども、2年、3年とするうち、認めてもらった部分はちょっとありますかね。

一つは、私ごとですが、家内が神経難病でありまして、徐々に身体の機能が衰えていくわけですね。どこかで書いたこともあるんですけども、最初のころ、そのことを石牟礼さんに相談したこともあるんです。

石牟礼さんもパーキンソン病になったばかりのころで、そのときに石牟礼さんがおっしゃった言葉は、本にも書いていますけれども、「病気は神様からのいただきものと思うことがあるんです。病気になったおかげで、健康な人には感じられないこと、わからないことも私にはわかります。だからこそ、いただいた時間をおろそかにしてはいけない」ということを石牟礼さんがおっしゃっていたことがあって、そういうやりとりをしたことが、私が空間に入れてもらっていた理由の一つになっていると思います。

渡辺さんにしても、石牟礼さんにしても、私が家に難病の家族がいるということを多分斟酌してくれたと思います。ただ取材に来ているのではなくて、肉声をプールしに来たのではなくて、自分が生きるために来ている感じもあるではないですか。多分、そういう感じを2人は認めてくださった。だから、家内にも感謝なんですよ。

2人は、その証拠にしょっちゅう私に聞きますもん、「奥さん、どんなですか」。石牟礼さん

なんか、自分が息も絶え絶えなのに、「奥様はどなたですか」。あなたがもっとしんどそうではないですか（笑）。常にそうおっしゃる方で、もう90なので、僕の身内のことなんか忘れて当然なんですよ。なのに、そういうことをおっしゃるので。

書くことによって生きる人

ちなみに言うと、石牟礼さんは最後まで認知的なことは全くなかったですね。別に認知がなかったから優秀な人というわけではありませんけれども、そういう病状でしたね。亡くなる前の日も起きてプリンとかをペロッと食べているから。だから、必ずしも寝たきりになって衰弱したというのではないのです。

1週間前にもゆうめんという温かいやつ、それを奈良の映画監督、河瀬直美さんが、奈良はそうめんが名物で、そうめんを持ってきてくれたわけ。「私はこれをいまから調理してきます」とおっしゃるわけです。でも、それは無理です。で、私が施設の介護の人に言って、施設の社長の娘さんに言って、「わかりました。自宅でちょっとつくってきます」とか言って、それをつくってきてくれて、おわんいっぱいのにゆうめんを、亡くなる1週間前、完食しました。

だから、必ずしも日々衰弱したまま動けないというのではなく、ちゃんと最後まで生きようという意志はものすごくあったし、ほんとにそばにいたら、最後の血の一滴まで燃焼して生きられました。

司会 ご訃報はどこで……。

米本 介護施設で亡くなったんですけれども、ちょっと近くにいて、3時14分に亡くなったんですけれども。

僕は「加勢に来ました」といつも言っていたんですよ。石牟礼さんは、「手伝いに来ました」とか「取材に来ました」と言うと、あまり返事なさない。ただ、「加勢に来ました」と言ったら、顔がパッと輝くんです。「ああ、加勢ですか。よかですね。じゃあ、ちょっと読んでもらいましょうかね」とか言って、会話がスムーズに始まったので、私はこの2~3年、「加勢

に来ました」と言うのを常としていたんです。だから、亡くなった後も、「加勢に来ました」と言ったら、「えっ」といまにも言いそうな感じでした。朝方、4時か5時ごろ。

でも、そのとき、石牟礼さんの亡くなった顔を見て、どこかに行ってしまったけれども、すぐまた戻ってくるなという感じがした。それは別に幽霊となってUターンしてくるというのではなくて、石牟礼さんが魂を込めた作品が残っているわけだから。実際、石牟礼さんが亡くなって世界がなくなったとか、大地が消えたとか言っている人は、僕の周りにもいっぱいいるんだけれども、そういう人たちがいま何をしているかという、石牟礼さんの本を読んでいる。やっぱり魂がそっちに帰ってきているのかなと思いますね。

だから、オカルト的な言い方ではなくて、いかに文章を書くことに全力を傾注してきたか。最後は、はしを入れる小さい袋にまで書いていましたからね。とにかく書く人、書くことによって生きるということを……。そう言ったら、ほんとにきざな、僕もいま言っていて恥ずかしいですけども、でも、ほんとにそういう人がいるんだなと思いました。

大体原稿用紙とか、介護の人はやっぱり、「石牟礼さん、やめておきましょうね」とか、どうしても取り上げられてしまうんです。そうすると、「カレンダーばとってください」とか言って、カレンダーをいきなり切って、それをノートにして……。字は割と書けましたからね。最後はやっぱり書きたかった。

気になっていたのは、この秋に能が上演される、「沖宮」。ことしになってからは、「天草四郎」「海底の魂」とか、そういう言葉をよくお書きになっていたと思います。芝居つけがあってそう書くのならともかく、石牟礼さんの場合は、もう本心から自分の存在をかけて「海底の宮」とか「天草四郎」とかお書きになるので、うーん、秋……。もうちょっと、1カ月頑張れば、91だったんだけれども。

司会 ご本、本格評伝は初めてということになっているんですが、石牟礼さんの評伝がこれ

まで何で書かれなかったんですかね。書いた人に言うのもなんですけれども。

恋多き女

米本 多分、いろんな理由があると思うんですけれども、近代文学だと石牟礼道子を研究している人は割といるわけですよ。いるけれども、学者の世界は一点豪華主義で、個別のところだけを研究するでしょう、部分だけ。要するに、通史というか、流れは学者はしないんですよ。それが一つ。

あと、さっきも言ったように、熊本で、身近で、石牟礼さん、渡辺さんを知る人がことごとくそれをやらなかった。僕以上に知っている人とか、昔から2人の近くにいる人というのは山ほどいるんですよ。いるけれども、最近では来ないとか、多分、2人のことを書くのはちょっとおこがましいというか、そういう感じがあるんです。一つには、やはり渡辺さんへの遠慮。

司会 渡辺さんが書かないのに、僕が書けないということですか。

米本 そう、そう、そうです、そうです。

でも、それは思い過ごしであって、正面から渡辺さんに記録を書きたいとか伝記を書きたいと言えば、渡辺さんはだめと言う人ではないんです。記録の重要性というのをわかっている方なので。ただ、言う人がたまたまいなかった、偶然。

司会 渡辺さんのほうも、逆に、何となく米本さんに書いてもらいたいような雰囲気を感じてたんですよ。

米本 「君ももうちょっとしたら定年だな」とか、確かに昔から言われていたんです。それと、「書くにしても、作品、一通り目を通さないといけないしなあ」とか、謎はしばしば振っていたんです。

司会 渡辺さんは何で書かなかったんですか。

米本 自分はもう体力が続かんと言っていた。

「石牟礼道子小伝」というのがあって、それ

をネットでみると、いま、検索の上位なんですけれども、石牟礼さんが熊本県の賞をとったときに、渡辺さんが解説のかわりにミニ伝記を書いているんですね。でも、それは石牟礼さんが中年のころまでだから、これが本格とっているのは、それがあから。だから、そういうミニ伝記はあったわけです。

司会 書かれている3年、本当はもっと長くお付き合いがあるでしょうけれども、途中で、書き通せないとか、これ以上書けないとか、これは本にならないなと思ったときはありましたか。

米本 ありました。ふだん、大体行ったら、1日4~5時間ぐらいは一緒にいて、いくらでも会話はあるでしょう。あり過ぎるんですよ。僕の場合、あり過ぎた。4年ぐらいかけて、で、昔から知っているし、石牟礼さんの許可を得て、常にノート等はとっているし、発言も全部、やり過ぎた。だから、どれを書けばいいのかというのがものすごく大変。

なので、このメリットの一つが、逆にデメリットでもあったんです。知り過ぎてしまった。あと、さっき言ったプライバシーの問題。書いてないことは山ほどあるんですよ。これは氷山の一角にしかすぎなくて。

一つ書けたと思ったのは——こんな話、いいのか……。割と石牟礼さんが恋多き女ということがちょっとわかってくれたらいいなと。

司会 すごくわかりました。

米本 大体二枚目で頭のいい男が好きね。で、ちょっと不謹慎だけれども、最後まで許せないわけです。気は引くけれども、ぎりぎりまで行って、男のほうもその気になって近寄ってくるけれども、パッと身を翻す。

司会 悪女ですねえ。

米本 男にとっては大変です。

司会 もてあそばれますねえ。

米本 でもね、それが石牟礼さんのよいところ、魅力。上野英信さんにしても、結構2人、いい感じですよんね。

司会 いやあ、もてますよね。

米本 もてる。英信さんも魅力的だし、道子さんも。お互い、何よりも文学的才能を認め合っているわけだから。だから、渡辺さんとの関係も少しは書けたかな。

いままでやっぱりタブーなんですよ。そういうことは、地元の熊本の日日新聞だって、もっと2人のことを知っている人も、歴代いくらでもいる。だけど、なぜか書いてない。全く書いてない。渡辺さんが石牟礼さんの食事づくりをしていることすら書いてない。タブーと言ったら、熊日さんに悪いけれども、実際書いてない。何か書くのがはばかれる。

司会 忖度したのかもしれないですね。書いてはいけないのかなと。

米本 それと、一つは、もう時間がたってきて、確かに渡辺さんは一時期、ピリピリした方だったですよ。 “カミソリ教授” とか言われていたし、取材にもあまり応じなかったけれども、ここ7~8年で随分変わられたんです。そこにたまたま私がおって、ほんとにたまたまです。昔、十数年前に書こうとちょっと行ったら、もう撃沈してね、沈没していましたよ、ほんとに。渡辺さんにこっぴどく怒られたら、やっぱり行く気にもならんと思っただろうけれども。

司会 皆さん、読まれていると思うんですけども、とても普通ではない部分もあったりして、本当に等身大で書かれているのが、リアリティがすごいなと。いまおっしゃっただけで全部通じると思いますので。

◆ 質 疑 応 答 ◆

司会 そろそろ皆様から質問しても……。こんな形なので、何となく聞きながら話してしまったんですけども、せっかくなので、会場の皆様からご質問があれば、著者がお答えさせていただきますので。

何かこれを聞いておきたいということはございますでしょうか。お話の中で、ここがわからなかったというところでも構いませんが。

質問 この本を書かれた後に渡辺京二さんの反応というか、どういうことが書けていると言われたのか、また逆に、書いてないと言われたのか。そのあたりをもう少し教えていただけますか。

米本 ありがとうございます。(質問者は)福岡の昔からのなじみで、友情質問、ありがとうございます(笑)。

渡辺さんの反応は、自分で言うと本当にいやらしいんですけども、極めてよいです。うーん、褒めてくださいました。一つ手薄な部分は、水俣病闘争のチツソを占領するあたりがちょっと薄いです。そこをもうちょっと書いたらどうかな、というふうにおっしゃった。そのほかは、あの厳しい方が、あと、石牟礼さんも含めて、何か自慢になるので言いたくないけれども、褒めてもらっています。

だから、2人がオーケーだから、出版社にも出して下さいと言いに行ったわけで、2人がちょっとでも顔を曇らせたりしたら、もう本にはなってなかったの。厳しいですからね、2人。情で動きませんよ。情の人だけ。

司会 これ、渡辺京二さんの評伝にもなっているような感じがしました。だから、きっとご本人も思うところがいっぱいあったと思いますが。

米本 渡辺さんの大連からの孤独をもっと書かなければいけなかったですね。そうでないと、石牟礼道子さんと2人が何で共振したかという……。軍国少年が夢破れて、結核で身近な人の死をみたりとか、そういうディテールがちょっと不足しているけれども、でも、そこを書けば、石牟礼道子の分量がちょっとあれでしょう。それはもう次の課題ですね。

ただ、水俣病闘争を2人と一緒に闘った人に随分話を聞いたんですけども、そういう人たちは、いま、もう70前後になっているわけですよ。大体口をそろえて言うのは、「俺たちは心中の道行きにつき合わされた」。本質的には、やっぱりみんな、2人のそういう絶望への歩みというか、絶望的な状況ながら前へ進む的な2人に引っ張られたと思っている。

でも、それは悪いことではなくて、それが車のエンジンになったわけだから、2人が会えなかったら、本当のただの裁判闘争になっていたから、こんなふうに近代の病を問うみたいな哲学的課題にはなっていないので。

ただ、そこは私が……。 「そこは」というのは、何でみんなが“心中の道行き”と言うのか、普通の人がわかるように、今後書きたいと思います。

司会 2月に石牟礼さんが亡くなられてしまいましたけれども、今後も石牟礼さんのことは書き続けていかれるのでしょうか。

米本 ええ。新聞、福岡の九州版では連載しているし、その連載はずっと続けていきたいので。その連載1回が原稿用紙で大体5.5枚なんです。結構長いでしょう。

司会 長いですねえ。

米本 それを2014年春からいままでだから、会社もよく載せてくれると思いませんか。

司会 さすが毎日新聞（笑）。

米本 その分量は、なかなか4年も載せてくれませんよ。

司会 400字×5で2,000字ですよ。

米本 それを4年間、なかなか……。普通の常識を超えているでしょう。

司会 大長編近くということですよ。

米本 それは、僕がすごいわけでもなくて、何となく……。

司会 150行以上。

米本 だから、いままで原稿用紙だと400枚近くになっているはずなんです。私ひとりで行っているわけではなくて、僕が石牟礼さんとかのところに半日いる間、その分、カバーしてもらったりもするわけですよ。そういう人がいないととてもできないでしょう。

司会 そうですねえ。

米本 そう言うと、ちょっといい子ぶりっ子で。

それと、会社の編集幹部が書けよと言ってい

る。そうでないと、これだけの分量を……。ほかの社の人には、私にいつも「うちなら、とても載りませんよ」と言うけれども、内容がいいというのものもあるんですけれども（笑）。

ただ、一作家のことは限度がありますよ。石牟礼道子といっても、ちょっと書き過ぎという、私も常識外というのはわかっているんですけれども、出る杭は打たれるというけれども、出過ぎると打たれない、そういう感じ。

で、いま、読売文学賞をいただいてしまったので、逆に、しばらくは続けて大丈夫。

司会 お墨つきでね、受賞作なんですから。

米本 で、誰も文句言わないんですよ。

司会 何であいつばかり、こんな大作をずうっとやっているんだ、ということは言わない。普通、言う人はいませんよね。

米本 次は、本にする場合でも、手をつけずに新聞連載だけで、あとは、もう57なので、多分、次の本は退職してからになるでしょうから……。 こういう話はまずいですか。

司会 いや、全然全く……。すぐに次に取りかかるのかと思ったので。

米本 新聞記者が本を出すというのは、意外と難しいんですよ、いろんな著作権の問題とかがあつて。だから、気持ちよく出すには、やめてから出したほうがいい。

私の場合、毎日新聞に連載して、新潮社から本を出して、読売新聞の賞をもらっているでしょう。

司会 権利関係がぐちゃぐちゃ……。 （笑）。

米本 「おめでとう」と言う人もいるけれども、「大丈夫か」と言う人も少なくないんです。

司会 これ、別にいいんですよ。これで、全部、許可をとって。

米本 もう全部クリアしています。

司会 現役の新聞記者をやりながら、週に1回通って、もちろん、執筆はかかるでしょうし、そんな時間をどうやってつくられたんですか。夜中に書いたり……。

米本 いや、案外大したことない。例えば最

初のほうの章でも、30枚、40枚なんか、すぐ書けると言ったら、自分の能力を誇示しているのではなくて、ふだん、何年も自分の中で抱えていると、割とスツと出るものです。

それと、忙しいほうがよく書けるということがありませんか。

司会 うーん……。

米本 暇だと、逆にしないで、次の何かの間のほうが手が動いたりするでしょう。それがこのときは恒常的にあったし、大体こういうときというのは、やっぱりちょっとおりにきている。だから、書けるわけで。

いまはもう去ったので……。

司会 あ、そうですか、去ってしまいましたか。

米本 去ってしまった。だから、そんな大したことではない。例えばいまはスマホでもあるでしょう。スマホでメモとかしておけば、原稿用紙1枚、2枚とかはすぐ書けます。

司会 スマホにメモするタイプだったんですね。

米本 芥川賞作家の山下澄人さんという人も、スマホでいきなり書くと書いていたから。だから、全然珍しくも何ともないし、書けますよ。書けるし、パソコンよりもいい文章が書けるかもよ（笑）。

要するに、頭が違う。パソコンだと、頭で考えているような感じがするんですけども、電車の中でスマホだったら、天に向けて開かれている僕という感じ（笑）。

司会 よくわかるような、わからないような。こっちのほうが、自分の思っている、そのままの文章になりますか。

米本 あと、片手で一応こう……。時々ですよ、それもね。でも、書いておくと、やっぱり後で使える。で、ほら、単語があると、そこから広がっていくではないですか。

丸山健二さんという作家に取材したときに、丸山さんが、朝、とにかく何か書く。あの人は朝4時から書くんですけども、「よく書くことがありますね」と言ったら、「テーマとか主

題とか話題とか、そんなのは関係ないよ」とおっしゃる。つまり、「何か一文字書けよ。その言葉が呼びかけてくるものが必ずあるから、そこから広げていけよ、おまえ」とか言って、それは5~6年前だけれども、それを時々思い出して、ああ、そうか、と。

それで、丸山さんが例に出していたのは、ボクサー。リングに上がらなくなると、上がるのが怖くなる。それと同じで、「とにかくちょっと言葉を書きつけるようにしておけば、案外、書けるものだぞ」。時々、丸山さんのことを思い出したりします。

司会 いまも毎日、何らか書くようになさっておられるんですか。

米本 いや、そんなことはないです。

司会 いま、ちょっとおりにこなくなってます。

米本 でも、ほんとは書かないと……。

石牟礼さんだって、昔は封建的な農家の主婦で、一日中、重労働で、朝4時から畑に出て、その間書いていたわけだから。

司会 そうですね、確かに。

米本 昔は電気もなくて、お皿に菜種油か何かで、そんな世界ですもんね。で、よく書いたなど。

司会 『苦海浄土』というのは、藤原書店のは、こんな厚いんですよ。よくその間に……。もちろん、時間軸が違いますけれども。

会場からまだ何かございましたら……。よろしいですか。では、ちょっと早いですけれども。

先ほど、控室で揮毫を書いていただきました。もちろん、自筆なんですけれども、文字があるので、ご自身で読んでください。

米本 日は日に
昏るるし
雪やあ雪
降ってくるし
ほんにほんに まあ
どどこ
漂浪（され）きよりますとじゃろ

これは石牟礼さんの詩なんですけれども、この本の冒頭にも、エピグラフですね。

司会 そうですね、一番冒頭の写真の後に、米本さんが、ここの本の冒頭には、この言葉を印刷してくれ、というふうに編集者の方に頼んだと先ほど聞きまして、編集者の方いわく、もっと衝撃的な言葉とか、もっとグワーンとくるような言葉をいっぱい残されているのに、何でこの言葉なのだろうとおっしゃっていたので、何でこの言葉を選ばれたのか、教えていただいていますか。

米本 最後に、「漂浪（され）きよりますとじゃろ」という言葉、「されく」という言葉、要するに、「されく」というのはぶらぶら放浪することなんですけれども、まさに石牟礼さんそのものなんです。

司会 漂浪、漂うに浪人の「浪」で、それで、「く」の送り仮名で、されく。

米本 水俣では、遠漂浪（とおざれき）とか高漂浪（たかざれき）とか、要するに、魂がどこかに行ってしまって迷っている人のことを言うんです。で、「されく」というのは割と普通に鹿児島あたりでも使うし、宮崎でも使うし、要するに、その辺をぶらぶら歩く人。これは石牟礼さんのキーワードで、彼女自身、昔からされく人。で、最後までされていた人ですから、これ以外にないです。

司会 ちなみに、評伝のサブタイトルの「渚に立つひと」というのも、米本さんがつけたサブタイトル。先ほどおっしゃったように、渚というのが、またその立ち位置を象徴しているということですね。

米本 近代と前近代のはざまであり、実際の海の渚であり、生と死の境目の渚であり、常に境目にいた人で、ほんとにどっちにも行かず境目にいた人。でも、時々陸に上がってきて、書く、表現者としての強さもあった人。

司会 確かに……。

これ、多分、ご本の中に入っているもので、読んでいただければと思います。

では、特にあとなければ……。米本さんのほうからも、あとお話ししておかなければいけな

かったことはございますか。

米本 そうですね、最後、締めくくりという意味ではなくて、石牟礼という姓ですね。ご本人はすごく気に入っていて、「サークル村」に行ったときも、最初のペンネームが石道子さんですよ。

もともと家が石工屋さんで、一時期は手広く……。チッソが来たから、港とかにそういう石工が要るわけです。だから、天草から渡ってきたのが道子さんの家なだけけれども、石牟礼さんが石に執着されていたというのはおもしろいなと思って。

中年以降も石関係の展覧会というのは必ず足を運んでいたもので、ただ単に名前が石がついているからというのではなくて、石というのは、道子さんにとって何事かなんですよ。

で、お父さんの亀太郎さんは、市井の哲学者とも言うべき大変優秀な人なんです。一応天草から来た素性の知れないような、過去が闇みたいな人なだけけれども、この人はやっぱり優秀な石牟礼さんのおじいさんのその下で働いていたんだけど、「道子よ、石というのは年月そのものだぞ」と言っていたと私にいつも言っていました。

「道子よ、石というのはな、年月そのものなんだよ。年月が道子の隣で息しとるんだよ」と、お父さんがいつも小さい道子さんにそう言っていたらしい。だからかな。

司会 何ですかねえ。

米本 とにかく石というのは、道子さんにとって……。石牟礼という名前は鹿児島のほうの名前なんです。だから、結婚相手が石牟礼と決まった瞬間、すごくうれしかったと言っていた。結婚そのものには涙を流すほど嫌だったんだけど、名前はよかった。「むしゃーんよか」と。「格好いい」ということですね。

司会 石牟礼さんは、結婚して石牟礼さんになったんですね。

米本 うん、もとは吉田道子というから。吉田道子の『苦海浄土』というのと、ちょっと弱いんですね（笑）。

司会 確かに大変格好いい、ペンネームかと思うような……。

米本 やっぱこれも天の配剤の一つでしょうね。でも、本当に鹿児島あたりの姓で、ポツと来て……

司会 ぴたっとはまりましたね、確かに。

質問 水俣川の河口にも船津部落というのがあるようですが、私はそこではなくて、伊万里の生まれです。

ご著書の中で、たしか渡辺さんも石牟礼さんも「市民」という言葉があまり好きではなかったというようなことをどこかで書かれていたような気がするんですけども、私は割と長崎なんかに昔から思い入れがあって、いま、たまたま広島に住んでいるものですから、やっぱり「市民」という言葉はよく原爆の関係で聞くんです。

国民であったり、市民であったり、人間であったりして、ただ、「市民」というと、何かやっぱり欠けてしまうものがあるのではないかなということを感じると感じることがあって、ご著書の中で、「生類と風土の総体が近代の暴力に蹂躪された水俣という世界史的な事件」と書かれていて、多分、原爆もそこに入れられるかなと思うんですよ。

それで、だめもとでお聞きするんですけども、石牟礼さんが長崎とか広島の原爆のことについて何か語られたことはないでしょうか。もし、何かなければ、さっきの「市民」とかその辺のところをちょっとお話しいただければと思うんですが。

米本 「市民」は、やっぱり石牟礼さんと渡辺さんも含めて、ちょっと苦手なニュアンスの言葉。要するに、それは近代というものが前提になっているから。「市民」というと、どうしても個人の顔を隠して、一律なイメージがあるので、避けたかったのかな。もちろん、「市民」という言葉の豊かな意味があるんでしょうけれども、石牟礼道子的に言うのと、闘争に使うとしたら、その「市民」の「シ」をデスの「死」という字に書きかえて、逆転して使うというこ

とになったと思います。

あと、原爆について。写真家の石内都さんが最近2回ぐらい石牟礼さんのところに来て、石牟礼さんの手と足の写真を撮っていったんです。そのとき、原爆の話というのは、私もずっと聞いていたけれども、あまり石牟礼道子さんはなさなかった。

もうあまりそういうことをしゃべる体力はなかったけれども、ただ、石内さんも「石」がついているでしょう。石内さんが言っていて、なるほどと思ったのは、指は年月そのものだ。石牟礼さんの指をなぜ撮るかとか聞かれて、「年月そのもので、大事件というのと道子さんの手というのは拮抗するんですよ」みたいなことを石内さんが言っていた。

石内さんに原爆のことについてはついに語ることはなかった道子さんですけども、何年か前に、原爆の絵描きさんと共作した絵本があって、そのときに感想を聞いたときに、「人間の尊厳がじゅうりんされるのは、原爆も水俣病も同じですもんね」というふうに道子さんは語ったことがあります。

「人間が悲惨な状況に置かれるというのは、原爆も水俣も変わりませんもんね」というふうに、たしか2014年夏、託麻台リハビリ病院のロビーで聞きました。でも、それ以上はおっしゃらなかった。ちょっと型にはまった言葉かもしれないけれども、一応そういうことはありました。

きょう、何かお話がまとまらなくて、申しわけなかった。皆さん、わざわざ来てもらってありがとうございます。(拍手)

司会 以上で終わりにしたいと思います。ありがとうございます。

文責・編集部